愛知淑徳大学論集　―心理学部篇―　第 14 号　2024　1 － 16

母子間の血縁関係及び愛着関係が子どもの社会適応に及ぼす影響

― 実子・里子の社会適応能力の比較による検討 ―

西岡 弥生[1]・坂田 陽子[2]

要旨

母子関係が子どもの社会適応に与える影響について検証した研究は多くあるが，その関係性について，血縁関係の有無，もしくは母子間での愛着の質のどちらが重要であるかについては明らかになっていない。そこで本研究では，母親と血縁関係のある幼児（実子）と血縁関係の無い幼児（里子）およびその母親を対象に，母親に対しては子どもの問題行動の多寡を測定する Child Behavior Checklist（CBCL）課題を，子どもに対しては社会的問題解決能力を測定する Preschool Interpersonal Problem Solving Test（PIPS）課題および，既存の 3 つの尺度から項目を抜粋して作成した，母親に対する愛着測定尺度を実施し，血縁関係の有無との関連を検討した。その結果，母子間の血縁関係の有無はどの年齢においても子どもの社会適応には影響しなかった。一方，母親への愛着関係は年長児の問題行動にのみ影響し，母親への愛着が安定しているほど子どもの不安・抑うつ的な問題行動が抑制されることが明らかになった。結果は親子関係の観点から考察された。

キー・ワード：血縁関係，愛着関係，実子，里子

問題と目的

近年，要保護児童の増加を背景に社会的養護に関心が集まってきている。そうした中でしばしば話題に上がるのが，里子や施設児の社会適応の問題である（Wakelyn, 2020）。里子とは，児童福祉法第 27 条に基づき児童相談所が養育を委託した要保護児童のうち，里親家庭に委託された子どものことであり，養育者の住居で生活をともにし，家庭で家族と同様な養育を受けている。里親制度によって委託された子どもは里子，請け負う側は里親と呼ばれ，両者間に血縁関係は無い。

一般に里子や施設児は，実子と比べ社会適応が思わしくないといわれることが多い。例えば池田（1981）では，乳児院収容後に里子や養子にいった子どもたちの予後調査を行った結果，（1）一定の職業を有し社会に参加し，（2）異性との正常な対象関係を持ち安定した家庭生活を営み，（3）精神障害や非行など適応上の問題がない，という 3 点を満たし社会適応が良好であると判断されたのは，15 名中わずか 4 名であった。

また坪井（2005）は Child Behavior Checklist（CBCL）を用いて，児童養護施設の入所児と実子の問題行動の比較を行った。その結果，実子に比べて施設児の方が CBCL の総得点およびほぼ全ての尺度において得点が高いことから，施設児は実子に比べて行動や情緒の問題を多く抱えていることが明らかになった。

さらに田中・長友・前田・栗山・高山（2006）は The Pupil Rating Scale Revised（PRS）を用いて児童養護施設の入所児の認知能力を測定した。その結果，施設児の特徴として社会的行動に関する能力の低さが示され，学年が上がるにつれて人の気持ちを理解できず，粗野な行動をとることも明らかとなった。この結果に対し田中ら（2006）は，施設児の多くが相手の感情を読み取る際に自身が知る感情の名称と唱導させる過程をとるため，自身の感情に命名がなされていない場合は相手の感情を把握する時点でのアクセシビリティの悪さが

[1] ヒーローズきっず藤が丘教室
[2] 愛知淑徳大学心理学部

予測されると述べている。また自身の感情を把握できていても，感情を表出できないといった社会的スキルの問題を抱えていることも指摘している。

一方で，里子や施設児であっても良好な社会適応を示す結果もある。例えば山口（2007）は里親に対するインタビュー調査より，里親家庭に入り家庭的雰囲気を経験することで子どもは社会のルールを家族から学ぶことができ，将来自分が問題に直面した場合の対処方法といった社会的なスキルを身に着けていくことができる，と述べている。

また青木ら（2008）は，里子の問題行動の抑制には里親への愛着形成が重要であり，里親への愛着が適応的な群のほうが，里親への愛着が不安定な群よりも，里子の問題行動が少ないことを明らかにした。

子どもの問題行動と母子間の愛着関係を調べた研究では，子どもの外在的な問題行動と最も強い関連を示すのは，親の子どもに対するスーパービジョンの不足や親子の関わりの希薄さ，親の子どもに対する愛着感の欠如であることが明らかになっている（Loeber & Stouthamer-Loeber，1986）。また菅原ら（1999）は，縦断調査により子どもの外在的な問題行動と母親の否定的愛着感が正の相関関係にあることを明らかにし，子どもとの生活史が深まっていく中で子どもの外在的な問題行動に由来する育てにくさを反映し母親の否定的愛着観が芽生えてくる様子が窺えた，と述べている。

子どもの社会適応と母子間の愛着関係について，Bowlby（1973）は幼少期からの愛着関係を通して構築される愛着対象や自己に関する心的な表象モデルを「内的作業モデル」と提唱し，これが後の対人関係や社会適応の基盤となると述べている（Mikulincer & Florian, 1998）。内的作業モデルについては多くの研究がされており，内的作業モデルの傾向が中学生の社会的スキルの形成または実行に影響している可能性があることや（粕谷・菅原・河村，2000），母親の情緒的支持が子どもの社会的スキルを高め，その結果子どもの学級適応が良好になるというプロセスも実証されている（八越・新井，2007）。

以上のように，里子や施設児は実子と比較して，社会適応や認知能力が劣るという研究報告もあれば，そうではないという研究もある。一方で，母子の愛着不全は実子であっても，問題行動を生じさせることがある。すなわち，現在のところ，里子や施設児の多くに問題行動がみられるという報告が多い要因が，母子間に血縁関係の無いことであるのか，血縁関係の有無は関係なく，実子での研究結果と同様に母子間の愛着関係が不全であることであるのかは明らかではない。

そこで本研究では，血縁関係の有無の指標として里子・実子の 2 群を用いて，母親に対しては子どもの問題行動の多寡を測定する Child Behavior Checklist（CBCL）課題を，子どもに対しては社会的問題解決能力を測定する Preschool Interpersonal Problem Solving Test（PIPS）課題と，既存の 3 つの尺度から項目を抜粋して作成した，母親に対する愛着測定尺度を実施し，それらの相関関係を検討することで，子どもの社会適応に影響を及ぼすのは血縁関係であるのか，親子間での愛着の質であるのかを明らかにすることを目的とする。以下の 2 つのうちどちらの仮説が支持されるかを検討する。

もし子どもの社会適応に影響を与える要因が血縁関係であれば，親子間の愛着の質に関わらず，里子に比べ実子の方が子どもの社会適応が良好であるだろう（仮説 1）。一方もし子どもの社会適応に影響を与える要因が親子間の愛着の質であれば，血縁関係の有無に関わらず，親子間の愛着関係が安定しているほど子どもの社会適応は良好であるだろう（仮説 2）。

方　法

実験参加者

実子およびその母親　実子は縁故法にて年長児 1 名，I 保育園の募集にて 20 名の計 21 名と，その血縁関係がある母親が実験に参加した。園児は，園の先生方によってランダムに選ばれた年長児 5 名，年中児 5 名，年少児 5 名，2 歳クラス児 5 名の計 20 名であった。

里子およびその母親　里子は縁故法にて参加を募った。2 歳から年長までの里子がいる里親家庭

Table 1
参加実子・里子の学年別人数と平均年齢

	年長児		平均年齢	年中児		平均年齢	年少児		平均年齢	2歳クラス児		平均年齢
	男児	女児	歳	男児	女児	歳	男児	女児	歳	男児	女児	歳
実子	3	3	5.03	1	4	4.77	2	3	3.97	3	2	2.68
里子	1	2	5.92	1	2	4.72	2	1	4.08	1	3	2.50

のうち参加の同意が得られた 13 名の里子とその里母が実験に参加した。里子は年長児 3 名，年中児 3 名，年少児 3 名，2 歳クラス児 4 名の計 13 名であった。実子，里子の内訳は Table 1 の通りであった。

実子，里子ともに，日常会話の理解に著しい遅れがみられないと保護者および保育者が判断した子どもを実験の対象とした。

本研究では，全参加児のうち愛着課題に答えられなかった 2 歳クラス児 2 名および，PIPS 課題に答えられなかった 2 歳クラス児 2 名の，計 4 名を除く 30 名を分析の対象とした。

倫理的配慮および参加同意諾否

調査実施前に，研究の主旨，個人情報の保護，参加辞退の自由，途中辞退の自由，無報酬，無侵襲性，不参加による不利益の無いこと，を記載した依頼文書を参加児の保護者に配布した。それを参加児の保護者は各自で読み，参加に同意の場合は紙面上の署名欄に氏名を記入したのちに，研究に参加した。保護者が承諾しても，研究当日参加児が嫌がる場合は参加を見送ることとした。

場所および状況

実子　実子は保育園の相談室で実験を行った。ただし，1 名のみ実験者の自宅で実施した。相談室は実験中外部からの立ち入りを制限し，実験者 1 名と参加児 1 名のみで実験を行った。ただし 2 歳クラス児に関しては，個別での実験は不可能と判断し，実験中極力接触を控えるという条件で担任の先生の同席の下で実験を行った。実験は，実験者と参加児が机を挟んで向かい合う形で行われた。

里子　里子に関しては，実験者が家庭訪問を行い，各家庭で実験を行った。個室が用意できる場合は個室で，用意できない場合は実験中に里母の姿が参加児に見えないような位置で実験を行った。里子に関しても実験者 1 名と参加児 1 名のみで実験を行った。ただし里子に関しても，子どもの年齢によって個別での実験ができない場合は，実験中母子間での接触を最低限に控えるという条件で，里母の同席の上で実験を行った。実験は実験者と参加児が向かい合う形で行われた。

実験中の会話は全て IC レコーダーによって録音された。なお，母親に対して以下の調査を実施したため，対面式の実験は行っていない。

調査内容

母親に対する調査　母親（実母・里母）を対象に以下の調査を実施した。フェイスシートには，子どもの氏名，年齢，生年月日，性別，母親から見た子どもの最もいいところ，母親の氏名，職業を記入してもらった。

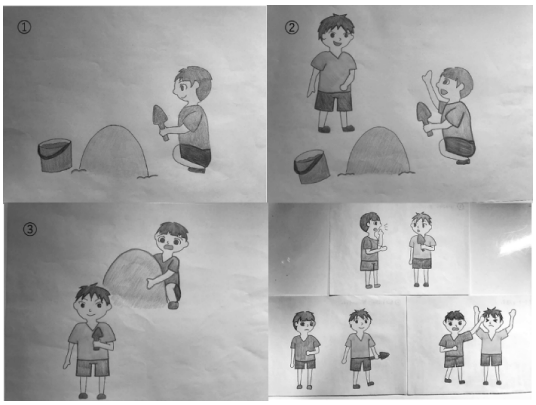
CBCL（Child Behavior Checklist）課題　既存の CBCL から以下の通り抜粋して使用した。子どもの問題行動の多寡を測定するために，2 歳児および年少児の母親には「子どもの行動調査票（2－3 歳用）」から 43 項目（不安神経質尺度，攻撃尺度，注意集中尺度，反抗尺度），年中児および年長児の母親には「子どもの行動チェックリスト（親用）4－18 歳用」から 42 項目（不安・抑うつ尺度，社会性の問題尺度，攻撃的行動尺度）を採用した。

子どもに対する調査　子ども（実子・里子）を対象に以下の調査を実施した。

インタビュー　氏名，学年，年齢を口頭で答えてもらった。

PIPS 課題（Preschool Interpersonal Problem Solving Test）　山田・和田・上田・桂田（2014）

Figure 1
PIPS 課題：砂場場面の紙芝居と選択絵カード例（男児用）



を参考に，紙芝居を作成した。紙芝居は（a）主人公が使用していたスコップを友人が持って行ってしまう「砂場場面」，（b）主人公が母親不在の間おやつと外出を禁じられる「留守番場面」，（c）友人が怪我をしてしまう「怪我場面」の計 3 場面であった。（a）の砂場場面は自己主張スキルを測定する課題，（b）の留守番場面は自己抑制スキルを測定する課題，（c）の怪我場面は援助行動を測定する課題として設定した。なお実験には主人公の性別と参加児の性別とが同じであるものを使用した（Figure 1）。

愛着測定尺度　児童の母親に対する愛着尺度（本多，2002），親子間の信頼感に関する尺度（酒井，2005），短縮版アタッチメント行動チェックリスト（青木・福榮・吉松，2011）の，既存の 3 つの尺度から抜粋して，子どもの母親に対する愛着尺度 10 項目を作成した（Table 2）。

手続き

母親に対する調査　園児の母親には，事前に園の先生から「フェイスシート」，「CBCL 質問紙」を渡してもらい，実験当日までに園に提出してもらった。回答時間や場所は指定していなかった。里子の里母には，里子の実験中に同様の質問紙に回答してもらい，実験終了後に直接実験者が回収した。

子どもに対する調査　机を挟んで実験者と向かい合う位置に参加児を座らせ，フェイスシート，愛着質問紙の内容を実験者が口頭で質問した。愛着を測定する際に，「今から○○君（ちゃん）のお母さんについて聞くから，お姉さん（実験者）に教えてくれるかな。」と教示を与えた。その後，PIPS 課題を実施した。

PIPS 課題では，参加児が感情移入しやすいように主人公に参加児と同じ名前を付け「今から紙芝居を読みたいから聞いてもらえるかな。（主人公を指さし）この子の名前は○○君（ちゃん）です。○○君（ちゃん）（参加児）と一緒の名前だね。今から，○○君（ちゃん）のお話をするから，○○君（ちゃん）になったつもりで聞いてね。」と教

Table 2
愛着測定尺度質問項目

①	悲しくなった時にお母さんに会いたくなりますか
②	困った(どうしたらいいかわからなくなる）とき，お母さんに聞きますか
③	お母さんといっぱいお話ししますか
④	お母さんともっと遊びたいですか
⑤	お母さんは好きですか
⑥	お母さんは○○君（ちゃん）のことが好きだと思いますか
⑦	お母さんと一緒にいるのは好きですか
⑧	お母さんが○○君（ちゃん）のおもちゃを「貸して」と言ったら貸してあげますか
⑨	お母さんがいなくても一人で遊べますか
⑩	お母さんに抱っこされるのは好きですか

はい…1点，いいえ…0点

Table 3
PIPS 課題の物語と回答選択肢

		課題	選択絵カード①	選択絵カード②	選択絵カード③
砂場（PIPS①）	1枚目	ある日のこと。○○君（ちゃんが）砂場で遊んでいました。			
	2枚目	するとそこに，お友達がやってきました。 二人は一緒に砂遊びをすることにしました。	◎ぼく（わたし）のだから返してと言う	△あーあ，持って行っちゃたなぁ，と見てる	×これは，僕（私）のだ，と叩いて取り返す
	3枚目	しばらく一緒に遊んでいましたが，お友達が○○君（ちゃん）が使っていたスコップを持ってどこかへ行こうとしてしまいました。 ○○君（ちゃん）だったら，どうするかな？			
留守番（PIPS②）	1枚目	ある日のこと。 おやつの時間にお母さんがおいしそうなケーキを出してくれました。 ○○君（ちゃん）がそのケーキを食べようとすると…			
	2枚目	お母さんが，「○○君（ちゃん），ちょっと待って。 お母さん，今から買い物（2歳クラス児は，お手洗い）に行かなきゃいけないから，ケーキを食べるのは少し待ってて ね。 ○○君（ちゃん），お母さんが帰ってくるまでお留守番していてね。（2歳クラス児は，お部屋から出ないでね。）」と言いました。 ○○君（ちゃん）だったら，どうするかな？	×お友達が来たから，遊びに行く	△お母さんが戻ってくる前に，ケーキを食べてしまう	◎お母さんが戻ってくるまで我慢して待つ
怪我（PIPS③）	1枚目	ある日のこと。 ○○君（ちゃん）はお友達と三人で鬼ごっこをしています。 すると，一人のお友達が転んでしまいました。			
	2枚目	転んだお友達は，膝をけがしてしまいました。 お友達は泣いています。 ○○君（ちゃん）だったら，どうするかな？	×もう一人の友達と遊ぶ	◎大丈夫って聞いてみる	△この子（もう一人の友達）ならどうするかなぁ，って見てる

◎…2点　△…1点　×…0点

示を与えた。課題は砂場場面，留守番場面，怪我場面の順に紙芝居形式で提示され，場面ごとに参加児ならどう解決するかを 3 つの選択肢から選んでもらった。なお，2 歳クラス児に関しては，一人で留守番をするという状況が現実的ではないと判断し，母親が手洗いに行く間外出及びおやつを禁じるというストーリーにした。

得点化

CBCL 課題　項目ごとに，回答が 0 の場合は 0 点，1 の場合は 1 点，2 の場合は 2 点として得点化した。

PIPS 課題　Table 3 に従い，最も望ましい選択肢を選んだ場合は 2 点，最も望ましくない選択肢を選んだ場合は 0 点，そのどちらでもない選択肢を選んだ場合は 1 点として得点化した。なお，選択肢についての自由回答は得点化しなかった。

愛着測定尺度質問紙　項目ごとに「はい」の場合は 1 点，「いいえ」の場合は 0 点として得点化した。年長児，年中児，年少児に関しては 10 項目すべてに回答できたため，10 点満点であった。2 歳クラス児については，回答の有無に差があった 4 項目（Table 2 参照。項目①，②，⑥，⑧）を除外した計 6 項目（6 点満点）を愛着測定尺度得点とした。なお，回答が「はい」，または「いいえ」のどちらでもない場合は，実験者と同大学の心理学を専攻する学生 2 人と実験者で話し合って，「はい」または「いいえ」のどちらかに分類した。また，回答の理由については得点化には考慮しなかった。

すべての統計解析には IBM SPSS Statiscs 23 を使用した。

結　　果

CBCL 課題

CBCL の分析に関して年齢を要因とする分析を行うのが良いが，使用すべき CBCL のプロフィールの種類が異なるため，すべて学年別に行った。

始めに CBCL のプロフィール表に従い，各項目得点から尺度得点を算出した。2 歳クラス児，年少児については「子どもの行動調査票（2－3 歳用）」のプロフィール表に従い，各項目得点から不

Table 4−1
2 歳児および年少の実子と里子の CBCL 課題得点の平均値・標準偏差

		CBCL総得点	CBCL-不安神経質	CBCL-攻撃	CBCL-注意集中	CBCL-反抗
2歳クラス児	実子	33.00 (7.55)	4.33 (1.53)	8.00 (3.00)	3.00 (1.00)	17.67 (8.08)
	里子	25.00 (5.66)	5.00 (1.41)	4.00 (2.83)	5.00 (0.00)	11.00 (1.41)
	t 値	1.256 , *ns*	-.490 , *ns*	1.488 , *ns*	-2.683 , *ns*	1.098 , *ns*
年少児	実子	14.40 (13.99)	2.00 (1.87)	3.20 (3.27)	1.80 (1.92)	7.40 (7.27)
	里子	19.33 (7.64)	1.67 (1.15)	5.67 (2.52)	2.67 (3.06)	9.33 (4.93)
	t 値	-.552 , *ns*	.274 , *ns*	-1.111 , *ns*	-.502 , *ns*	-.402 , *ns*

（　）内は*SD*

Table 4−2
年中および年長の実子と里子の CBCL 課題得点の平均値・標準偏差

		CBCL総得点	CBCL-不安・抑うつ	CBCL-社会性	CBCL-攻撃行動
年中児	実子	10.40 (8.02)	2.40 (1.82)	2.40 (2.19)	5.60 (4.39)
	里子	17.67 (8.02)	2.00 (1.41)	1.50 (0.71)	10.00 (4.24)
	t 値	-1.241 , *ns*	.274 , *ns*	.542 , *ns*	-1.205 , *ns*
年長児	実子	22.33 (8.59)	6.33 (2.94)	3.33 (1.63)	12.67 (6.15)
	里子	17.00 (3.61)	2.67 (1.53)	4.33 (4.04)	10.00 (4.58)
	t 値	1.004 , *ns*	1.980 , *ns*	-.552 , *ns*	.656 , *ns*

（　）内は*SD*

安神経質尺度，攻撃尺度，注意集中尺度，反抗尺度の 4 つの尺度得点を算出した。年中児，年長児については「子どもの行動チェックリスト（親用）4−18 歳用」のプロフィール表に従い，各項目得点から不安・抑うつ尺度，社会性の問題尺度，攻撃的行動尺度の 3 つの尺度得点を算出した。

血縁関係別の CBCL 課題総得点および各尺度得点の平均値，標準偏差を学年ごとに示した（Table 4−1，4−2）。

CBCL 課題得点と血縁関係との関連

続いて CBCL 課題得点における血縁関係（実子と里子）について独立したサンプルの *t* 検定を行った。その結果，いずれの学年においても CBCL 課題得点に血縁関係各群の有意な差は認められなかった（Table 4−1，4−2）。

CBCL 課題得点と愛着測定尺度得点との関連

次に CBCL 課題得点と愛着測定尺度得点との相関係数を算出した。その結果，年長児において母子間の愛着測定尺度得点と CBCL 課題不安・抑うつ尺度得点が有意な負の相関関係にあった（$r = -.75$, $p < .05$）（Table 5）。したがって，子どもの問題行動の多寡に血縁関係による差はなく，年長児においては母子間の愛着が安定しているほど子どもの不安・抑うつ的問題行動が少ないことが明らかとなった。

Table 5
年長児の愛着測定尺度得点関係と
CBCL 課題得点との相関係数

	愛着
愛着	—
CBCL総得点	-.62
CBCL-不安・抑うつ	-.75 *
CBCL-社会性	-.37
CBCL-攻撃行動	-.26

** $p < .01$. * $p < .05$.

Table 6
PIPS 課題の学年別平均値・標準偏差

		PIPS総得点	PIPS①	PIPS②	PIPS③
2歳クラス児	実子	2.33 (0.58)	0.33 (0.58)	1.67 (0.58)	0.33 (0.58)
	里子	3.50 (3.54)	1.00 (1.41)	1.00 (1.41)	1.50 (0.71)
年少児	実子	4.40 (2.19)	1.10 (0.89)	1.80 (0.45)	1.20 (1.10)
	里子	4.67 (2.31)	1.33 (1.15)	1.33 (1.15)	2.00 (0.00)
年中児	実子	5.40 (0.89)	1.80 (0.45)	1.60 (0.89)	2.00 (0.00)
	里子	5.33 (1.15)	2.00 (0.00)	2.00 (0.00)	1.33 (1.15)

（　）内は*SD*

PIPS 課題

始めに，場面ごとの得点と合計得点を算出した。各場面得点は 2 点満点で，全 3 場面で構成されているため，合計得点は 6 点満点であった。

PIPS 課題得点について学年ごとの平均点，標準偏差を算出した（Table 6）。年長児は全員が PIPS 課題を全問正解しているため以降の分析の対象には加えなかった。PIPS 課題①は自己主張スキル，PIPS 課題②は自己抑制スキル，PIPS 課題③は援助行動を測定する指標であった。

PIPS 課題得点と学年および血縁関係との関連

PIPS 課題総得点を従属変数，学年と血縁関係を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った。その結果，学年の主効果が有意となった（$F(3, 22) = 4.679$, $p < .05$ ）。引き続き Tukey の HSD 法による多重分析を行った結果，年中児（$M = 5.38$）は 2 歳クラス児（$M = 2.80$）に比べて有意に成績が高いことが示された（ $p < .05$）。したがって，年中児は 2 歳クラス児に比べて社会的問題解決能力が有意に高いことが分かった。

続いて PIPS 課題ごとに学年と血縁関係の 2 要因分散分析を行った。

①砂場場面得点を従属変数，学年と血縁関係を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った結果，学年の主効果が有意となった（$F(3, 22) = 5.125$, $p < .01$）。引き続き Tukey の HSD 法による多重分析を行った結果，年中児（$M = 1.88$）は 2 歳クラス児（$M = .60$）に比べて有意に成績が高いことが示された（$p < .01$）。したがって，年中児は 2 歳クラス児に比べて，社会的問題場面での自己主張的な問題解決能力が有意に高いことが分かった。

②留守番場面得点を従属変数，学年と血縁関係を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った結果，交互作用（$F(3, 22) = .879$, *ns*），血縁関係の主効果（$F(1, 22) = .528$, *ns*），学年の主効果（$F(1, 22) = 1.232$, *ns*）のいずれにおいても有意な効果は認められなかった。したがって，どの群間においても自己抑制的問題解決能力には差がないことが分かった。

③怪我場面得点を従属変数，学年と血縁関係を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った結果，交互作用（$F(3, 22) = 2.782$, *ns*），血縁関係の主効果（$F(1, 22) = 1.794$, *ns*），学年の主効果（$F(3, 22) = 3.014$, *ns*）のいずれにおいても有意な効果は認められなかった。したがって，どの群間においても援助行動的問題解決能力には差がないことが分かった。

PIPS 課題得点と愛着測定尺度得点の相関

次に，PIPS 課題の総得点及び各場面得点と，愛着測定尺度得点の関連について学年別の相関係数を算出した。その結果，いずれの学年においても母親への愛着測定尺度得点と PIPS 課題得点の間に有意な相関は認められなかった。詳細を記載する。

2 歳クラス児は，PIPS 課題総得点 $r = -.57$, *ns*., PIPS 課題①得点 $r = -.41$, *ns*., PIPS 課題②得点 $r = -.61$, *ns*., PIPS 課題③得点 $r = -.22$, *ns*.であった。

年少児は，PIPS 課題総得点 $r = -.45$, *ns*., PIPS 課

Table 7
学年別，愛着群別 PIPS 課題得点

			PIPS総得点	PIPS①	PIPS②	PIPS③
2歳クラス児	愛着	高群	2.00 (1.00)	0.33 (0.58)	1.00 (1.00)	0.67 (0.58)
		低群	4.00 (2.83)	1.00 (1.41)	2.00 (0.00)	1.00 (1.41)
年少児	愛着	高群	4.00 (2.31)	1.25 (0.96)	1.75 (0.50)	1.00 (1.15)
		低群	5.00 (2.00)	1.50 (1.00)	1.50 (1.00)	2.00 (0.00)
年中児	愛着	高群	5.40 (0.89)	1.80 (0.45)	2.00 (0.00)	1.60 (0.89)
		低群	5.33 (1.15)	2.00 (0.00)	1.33 (1.15)	2.00 (0.00)

（　）内は*SD*

題①得点 $r=-.37$, *ns*., PIPS 課題②得点 $r=-.12$, *ns*., PIPS 課題③得点 $r=-.55$, *ns*.であった。

年中児は，PIPS 課題総得点 $r=.39$, *ns*., PIPS 課題①得点 $r=-.21$, *ns*., PIPS 課題②得点 $r=.21$, *ns*., PIPS 課題③得点 $r=.42$, *ns*. であった。

したがって，学年ごとにみても，子どもの社会的問題解決能力と母子間の愛着関係は関連がなかった。

さらに PIPS 課題の総得点及び各場面得点と，愛着測定尺度得点の関連について血縁関係別の相関係数を算出した。その結果，どちらの血縁関係においても母親への愛着測定尺度得点と PIPS 課題得点の間に有意な相関は認められなかった。詳細を記載する。

実子は，PIPS 課題総得点 $r=.11$, *ns*., PIPS 課題①得点 $r=.12$, *ns*., PIPS 課題②得点 $r=.07$, *ns*., PIPS 課題③得点 $r=.08$, *ns*.であった。

里子は PIPS 課題総得点 $r=.29$, *ns*., PIPS 課題①得点 $r=.12$, *ns*., PIPS 課題②得点 $r=.12$, *ns*., PIPS 課題③得点 $r=.05$ *ns*. であった。

したがって，血縁関係別にみても，子どもの社会的問題解決能力と愛着測定尺度得点の間に有意な関連はみられなかった。

愛着群分類　学年ごとに愛着測定尺度得点の平均値を算出し，その平均点（以下に記載）を境に得点の高い対象児を愛着高群，得点の低い対象児を低群として分類した。愛着測定尺度得点の平均値（*SD*）は，2 歳クラス児が 5.57 点（$SD=2.47$），年少児が 9.13 点（$SD=1.80$），年中児が 8.00 点（$SD=0.99$）であった。構成は，2 歳クラス児で高群 3 名，低群 2 名，年少児で高群 4 名，低群 4 名，年中児で高群 5 名，低群 3 名であった。愛着測定尺度得点の高低群別の PIPS 課題総得点および各場面得点の平均値・標準偏差を算出した（Table 7）。

PIPS 課題得点と学年および愛着群との関連

PIPS 課題総得点を従属変数，学年と愛着群を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った。その結果，学年の主効果が有意となった（$F(3, 22)=5.002$, $p<.01$）。引き続き Tukey の HSD 法による多重分析を行った結果，年中児（$M=5.38$）は 2 歳クラス児（$M=2.80$）に比べて有意に成績が高いことが示された（$p<.05$）。したがって，年中児は 2 歳クラス児に比べて社会的問題解決能力が有意に高いことが分かった。愛着群の主効果（$F(1, 22)=1.823$, *ns*），交互作用（$F(3, 22)=.706$, *ns*）は有意ではなかった。

続いて各 PIPS 課題について学年と愛着群の 2 要因分散分析を行った。

①砂場場面得点を従属変数，学年と愛着群を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った結果，学年の主効果が有意となった（$F(3, 22)=5.85$, $p<.01$）。引き続き Tukey の HSD 法による多重分析を行った結果，年中児（$M=1.88$）は 2 歳クラス児（$M=.60$）に比べて有意に成績が高いことが示された（$p<.01$）。したがって，年中児は 2 歳クラス児に比べて，社会的問題場面での自己主張的な問題解決能力が有意に高いことが分かった。愛着群の主効果（$F(1, 22)=1.258$, *ns*），交互作用（$F(3, 22)=.268$, *ns*）は有意ではなかった。

Table 8
血縁関係・愛着群別 CBCL 総得点の
平均値・標準偏差

		実子	里子
愛着	高群	17.73 (12.03)	21.29 (5.82)
	低群	20.25 (12.96)	15.75 (6.08)

( )内は*SD*

Table 9
実子・里子別，愛着群別 PIPS 課題総得点の
平均値・標準偏差

		実子	里子
愛着	高群	4.55 (1.86)	5.00 (1.91)
	低群	5.25 (1.49)	5.00 (2.00)

( )内は*SD*

Table 10
課題間の相関係数

	PIPS総得点	PIPS①	PIPS②	PIPS③
CBCL-総得点	-.26	-.30	.10	-.35
CBCL-不安神経質	-.16	-.12	-.20	-.08
CBCL-攻撃	-.24	-.34	.28	-.39
CBCL-注意集中	.11	-.03	.23	.08
CBCL-反抗	-.20	-.28	.25	-.32
CBCL-抑うつ	.03	.08	-.01	
CBCL-社会性	.16	.12	.12	

②留守番場面得点を従属変数，学年と愛着群を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った結果，交互作用（$F(3, 22) = 1.843$, *ns*），愛着群の主効果（$F(1, 22) = .008$, *ns*），学年の主効果（$F(3, 22) = .830$, *ns*）のいずれにおいても有意な効果は認められなかった。したがって，どの群間においても自己抑制的問題解決能力には差がないことが分かった。

③怪我場面得点を従属変数，学年と愛着群を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った結果，交互作用（$F(3, 22) = .766$, *ns*），血縁関係の主効果（$F(1, 22) = 2.831$, *ns*），学年の主効果（$F(3, 22) = 3.329$, *ns*）のいずれにおいても有意な効果は認められなかった。

この結果から，愛着の高群，低群で比較しても子どもの社会的問題解決能力に母親への愛着関係は影響を及ぼさないことが分かった。

血縁関係と愛着群　各課題得点を従属変数，血縁関係と愛着群を独立変数とする 2 要因の分散分析を行った。

まず，CBCL 総得点を従属変数，血縁関係と愛着群独立変数とする 2 要因の分散分析を行った（Table 8）。その結果，交互作用（$F(1, 26) = .944$, *ns*），血縁関係の主効果（$F(1, 26) = .013$, *ns*），愛着群の主効果（$F(1, 26) = .132$, *ns*）のいずれにおいても有意な効果は認められなかった。

次に，PIPS 課題得点を従属変数，血縁関係と愛着群を立変数とする 2 要因の分散分析を行った（Table 9）。その結果，交互作用（$F(1, 26) = .620$, *ns*），血縁関係の主効果（$F(1, 26) = .885$, *ns*），愛着群の主効果（$F(1, 26) = .620$, *ns*）のいずれにおいても有意な効果は認められなかった。

課題間の相関　PIPS 課題得点と CBCL 課題得点の関連を検討するために，相関係数を算出した（Table10）。

その結果，PIPS 課題得点（各場面得点および総得点）と CBCL 課題得点（各尺度得点及び総得点）の間にいずれにおいても有意な相関は認められなかった。

考　察

本研究の目的は，子どもの社会適応に影響を及ぼすのは血縁関係であるのか，親子間での愛着の質であるのかを明らかにすることであった。そこ

で実子と里子の母親および本人を比較することで解明しようとした。

仮説は以下の 2 点であった。1）もし，子どもの社会適応に影響を与える要因が血縁関係のみであれば，CBCL 課題及び PIPS 課題の結果に里子・実子間で差が出るだろう。つまり親子間の愛着の質に関わらず，里子に比べ実子の方が子どもの社会適応が良好であるだろう（仮説 1）。2）一方もし子どもの社会適応に影響を与える要因が親子間の愛着の質のみであれば，CBCL 課題及び PIPS 課題の結果に愛着の安定群・不安定群間で差が出るだろう（仮説 2）。つまり血縁関係の有無に関わらず，親子間の愛着関係が安定しているほど子どもの社会適応は良好であるだろう。

研究の結果，以下のことが明らかになった。まず，CBCL 課題得点について血縁関係の有無は影響しておらず，年長児における母子間の愛着関係のみが影響を及ぼしていた。次に，PIPS 課題得点については血縁関係の有無及び母親への愛着測定尺度得点のどちらも影響していなかった。

本研究の結果は，仮説 2 を一部支持するものであった。仮説②を支持した結果として，年長児の CBCL 課題不安・抑うつ尺度得点と母親への愛着測定尺度得点が有意な負の相関をもち，母親への愛着が安定しているほど子どもの不安・抑うつ的な問題行動が抑制されることが明らかとなった。仮説 2 をすべてにおいて支持しなかった理由として，CBCL 課題の不安・抑うつ得点以外の他の下位尺度得点，および PIPS 課題得点は母子間の愛着関係と関連がなかった。また血縁関係の有無に関しては，CBCL 課題得点及び PIPS 課題得点の双方に影響を及ぼさなかった。これらの理由のため, 仮説 2 の一部しか支持されない結果となった。以降，課題ごとに血縁関係及び愛着関係との関連を検討する。

子どもの問題行動と親子関係

本研究では，子どもの問題行動（CBCL 課題得点）と血縁関係の有無には関連が認められなかった。したがって，子どもの問題行動の多寡に母親との血縁関係の有無は影響を及ぼさないことが分かった。一方，子どもの問題行動と母親への愛着尺度得点には年長児において関連が認められ，母親への愛着が安定しているほど子どもの不安・抑うつ的な問題行動が抑制されることが明らかになった。以上の結果より，子どもの問題行動，特に内在的な問題行動の多寡に影響を与えているのは，血縁関係の有無ではなく，母子間の愛着関係であることが分かった。したがって実子であっても里子であっても，母子間の愛着関係が安定している子どもは自己否定的にならず，そこから派生する問題行動も抑制されるのではないかと考えられる。本研究で年長児を対象に測定した CBCL 課題下位尺度は「不安・抑うつ尺度」,「社会性の問題」,「攻撃尺度」の 3 つであった。しかしながら母親への愛着と関連があったのは内在的な問題行動の多寡を測定する「不安・抑うつ尺度」のみであり，外在的な問題行動の多寡を測定する「社会性の問題尺度」,「攻撃性尺度」は愛着関係と関連が認められなかった。

この原因として，内的作業モデルに基づくストレス状況への対処法の違いが考えられる。内的作業モデルとは，自分は他者から受け入れられる存在かどうか，また他者からどのような応答が期待できるか，他者は信頼できる存在であるのかどうか，といったような後の対人関係や社会適応の基盤となるモデルであり，幼少期からの被養育経験を通して構築される（Bowlby，1973）。内的作業モデルはストレス状況においても顕著に作用することが分かっており，愛着安定型の人は脅威を低く評価して他者からのサポートを探そうとする傾向があり，回避型の人は脅威のある状況から距離を置こうとして他者からのサポートを求めない傾向がある。またアンビバレント型の人は自身のネガティブ感情に焦点を当てる傾向が強いことが明らかにされている（Mikulincer & Florian, 1998）。つまり，愛着安定型の人はストレス状況に対処する際のベクトルが他者へ向かう外向的な性質があり，反対に愛着不安定型の人はストレス状況に対処する際のベクトルが他者へ向かわず，自身に向く内向的な性質があると言える。したがって本研究でも，愛着が安定している子どもほど不安・抑うつ的な問題行動が抑制されたと考えられる。

また，子どもの問題行動と母親への愛着測定尺

度得点の間に負の相関がみられたのは年長児のみであった。この結果から2つの可能性が考えられる。1つ目は，単に子どもが自身の問題行動を抑制できるようになる年齢が，年中から年長に上がる時期だという可能性である。幼児の自己統制スキルに関して金山ら（2011）は，「我慢」と「頑張り」の2因子からなる「自己統制スキル」と，「正当な欲求」と「自主性」の2因子からなる「自己主張スキル」について年齢との関連を検討した。その結果どちらのスキルも有意な年齢の主効果があり，3歳児よりも4歳児，5歳児，6歳児の方が，4歳児よりも5歳，6歳児の方が得点が高かったことを報告している。また，4歳児，5歳児，6歳児においては自己統制スキルと外在的な問題行動の間に有意な負の相関関係を確認した。一方で，3歳児においては自己統制スキルと外在的な問題行動の間に相関関係は確認されなかった。加えて，使用した社会的スキル尺度の「自己統制スキル」のα係数が3歳児のみ低かった。

金山ら（2011）は3歳時点では自己統制スキルがまだ個人差として定着していない可能性を指摘している。幼児の自己抑制について柏木（1988）は，「遅延可能」，「制止・ルールへの従順」，「フラストレーション耐性」，「持続的対処・今季」の4下位次元からなると述べており，そのうち遊びの順番や欲しいもの，したいことなどを待てるという「遅延可能」，制止やルールに従うことが出来るという「制止・ルールへの従順」については，3歳時点から順調に発達することが明らかとなった。

一方，自分の欲求や意向が通らない場合やそれが他と対立した場合，感情を爆発させたり，自分の意見だけを押し通そうとしたりせずに我慢できるという「フラストレーション耐性」は3歳時点ではまだ十分に機能していないことが報告されている。このように子どもの問題行動の抑制には年齢的な発達段階があり，3歳，4歳時点では自己抑制が未熟であると言える。したがって本研究でも2歳クラス児，年少児，年中児ではまた問題行動の抑制に未熟さがあり，年長児のみ結果がでたと考えられる。

2つ目は，それ以前に母親と築いてきた安定した愛着関係が，子どもの問題行動を抑制させた可能性である。そのため母子間の愛着関係が安定してから子どもの問題行動が抑制されるまでにはタイムラグが生じ，年長児のみ相関が認められたと考えられる。母子間の愛着関係と子どもの能力の関連について，母親の Mind-Mindedness（以下MM）に着目した研究がある（Meins, 1997；Meins, 2002；篠原 2003；篠原，2011 等）。MM とは，「養育者が子どもの行動の背景にある心（mind）について，つい目を向けてしまう（minded）傾向」であり，愛着安定型の子どもの養育者が持つ共通の特徴であると言われている（Meins, 1997）。母親の持つ MM と子どもの能力との関連についての一連の研究から，母親の MM と，子どもが18ヶ月時の「感情状態」に関する語の理解や使用，全体的な語彙理解，「思考認知状態」に関する語の使用とが正の相関関係にあることや（篠原，2007），子どもが乳児期の時点で高い MM を持っていた母親の子どもは4，5歳時の内的状態への言及頻度が高く（篠原，2006），4歳時の「感情のラベリング課題」，「言語理解能力」に優れることがわかった（篠原，2011）。これらの結果に対し篠原は，高い MM をもつ母親の子どもは一貫して豊富な心的語彙に触れており，そうした相互作用が子どもの心的語彙の発達ないし他者感情理解の発達を促進するのではないかと述べている。

つまり，母子間の愛着関係が安定している子どもの母親ほど高い MM を持ち，その高い MM を持つ母親との関りが子どもの能力の発達を促進させ，ひいては社会適応能力の発達に影響を及ぼすと考えられる。したがって，母子間の愛着関係と子どもの問題行動の多寡は因果関係にあり，母子間の安定した愛着関係が後の子どもの問題行動の抑制に影響を与えるかもしれない。

子どもの社会的問題解決能力と親子関係

本研究では，血縁関係及び母親への愛着のどちらも子どもの社会的問題解決能力（PIPS 課題得点）と関連がなかった。つまり，母子間の血縁関係も愛着関係も子どもの社会的問題解決能力には影響していなかった。この結果から，子どもの社会的問題解決能力の発達には他の要因があると考えられる。考えられる要因の1つとして父親との

関係性があげられる。Loeber & Stouthamer-Loeber（1985）は，子どもの社会適応に影響を及ぼす要因として親の養育行動と養育意識をあげており，親の不良な養育が子どもの外在的な問題行動を先行すると述べている。ここでいう「親」とは，母親に限定されたものではなく，父親と母親の双方を含めており，父親からの影響もあることが窺える。

また親の実権の強さと養育態度が幼児の自己統制機能の発達にどのような影響を及ぼすのかについて，森下（2003）では以下のことが明らかにされた。

第 1 に親の受容的態度と子どもの自己抑制機能について，家庭でも園でも自己抑制の高い子どもは養護性が高いが攻撃性は低く，そのような子どもは母親も父親も養育態度が受容的であった。一方で家庭でも園でも自己抑制の低い子どもは養護性が低いが攻撃性が高く，そのような子どもは母親も父親も養育態度が否定的であった。したがって，受容的な親子関係の下では安定した自己抑制や養護性が形成され攻撃性が抑制される。一方で母親や父親との拒否的な関係の下では子どもは自己抑制や養護性を形成できず，そうした親子関係から生じる強いフラストレーションが場面を超えた強い攻撃性を生じさせるのではないかと述べられている（森下，2003）。

第 2 に親の統制力と子どもの自己抑制機能について，母親の統制が強く父親の統制が弱い「母統制型」では，男子の自己主張および攻撃性が高く女子の攻撃性も高かった。一方で父親の統制が強く母親の統制が弱い「父統制型」では，男子の思いやりが低かった。両親とも統制が弱い家庭では，女子の自己抑制が高かった。このように家庭における両親の統制力の比重によって，子どもの自己抑制機能，攻撃性および思いやりに与える影響が異なることが明らかになった。

第 3 に親の実権と子どもの自己抑制機能について，母親が父親より実権を持っている場合，女子の自己主張が高かった。一方で父親が母親より実権を持っている場合，男子の自己主張及び思いやりが高く，女子の思いやりが低かった。また男子において自己抑制が家庭でも園でも高い子と，家庭では高いが園では低い子との大きな差異は，父親の実権の強さにあった。このことから男子において，強いリーダーシップを持つ父親のいる家庭では自己抑制や養護性が高く攻撃性が低くなり，そのような父親のいない家庭では自己抑制や養護性が低く攻撃性が高くなる可能性がある，と森下（2003）は述べている。また両親ともに実権を持っている場合，男子の自己抑制，自己主張及び思いやりのすべてが低かった。このように，家庭においてどちらの親が実権を持つかが，子どもの自己抑制機能，自己主張機能及び思いやりの発達に与える影響を左右することが明らかになった。また菅原ら（1999）は，外在的な問題行動の抑制には，直接的に良好な父子関係を築くことが有効であると述べている。それと同時に，子どもの育児に奮闘する母親をサポートする父親の間接的な役割が大切であると述べている。

以上の先行研究から，子どもの問題行動の抑制，ひいては問題行動の抑制につながる自己主張スキル，自己抑制スキル，思いやり行動の発達には母親のみならず，父親との良好な関係性が重要であることが分かる。また家庭内における両親の統制力や実権の強さも重要な要因であることが分かった。本研究では，親子関係として母親との血縁関係の有無及び愛着関係の安定性を測定したため，父親からの影響が反映されなかった。その結果，子どもの自己主張スキルを測定した PIPS 課題①，自己抑制スキルを測定した PIPS 課題②，思いやりから促される援助行動を測定した PIPS 課題③のいずれにおいても，母子間の血縁関係の有無及び愛着関係のどちらも有意な関連性がみられなかったと考えられる。

また子どもは日常的に親以外にも多くの人間関係の影響を受けている。そのため子どもの社会的問題解決能力の発達には家庭外からの影響もあると考えられる。そうした家庭外の要因として，保育園・幼稚園は比較的大きな影響力があると考える。森下（2003）は，いくつかの園の保育特徴と子どもの行動特徴の関連性を検討した。その結果，「たくましさ」や「生き生きとした強さや明るさ」などを比較的重視している園の子どもは，自己主張や攻撃性が高く，自己抑制が低い傾向に

あった。つまりそのような園の子どもは，活動性が高く，不利な状況におかれても自身を押さえつけることなく乗り越えていく自己表現力の高さがあった。一方,「優しい心」や「生命を大切にする心」などを比較的重視している園の子どもは，自己抑制や養護性が高く，攻撃性が低い傾向にあった。つまりそのような園の子どもは，他者を傷つけることなく問題を解決する能力に優れ，他者を慈しむ心があった。以上の結果から森下（2003）は，園の保育特徴が園での子どもの行動特徴に影響している可能性があると述べている。本研究では，実験を行ったのが 1 つの園であったため，実験参加児の社会的問題解決の手法が類似していた可能性がある。そのため，回答の違いによる得点化を行っても差が出なかったと考えられる。

子どもの社会適応と親子関係

本研究では，子どもの社会適応能力を「問題行動の多寡」と「社会的問題解決能力」の 2 面から捉え, 血縁関係及び愛着関係との関連を検討した。

その結果，母親との血縁関係の有無は子どもの問題行動及び社会的問題解決能力のどちらにも関係していなかった。この結果は非常に重要であり，子どもの社会適応能力は実子だから優れている，里子だから劣っているということではなく，仮説 1 は棄却された。

一方，愛着関係は年長児の不安・抑うつ的問題行動と関連があり，母親への愛着関係が安定しているほど子どもの不安・抑うつ的問題行動が抑制されることが分かった。しかしながら母子間の愛着関係は，その他の問題行動及び子どもの社会的問題解決能力とは関連が認められなかった。つまり子どもの社会適応能力は，母子間の愛着関係のみに影響を受けているわけではなかった。先述の通り，子どもの社会適応能力は様々な要因が複雑に絡み合って発達していくと考えられる。したがって本研究の結果は「子どもの社会適応に影響を与える要因が親子間の愛着の質のみであれば，血縁関係の有無に関わらず，親子間の愛着関係が安定しているほど子どもの社会適応は良好であるだろう」という仮説 2 を一部支持するものであり，愛着が安定しているほど子どもの社会適応が良好ではあるが，母子間の愛着関係以外にも様々な要因が子どもの社会適応に影響を及ぼしている可能性が窺えた。

今後，子どもの社会適応能力に影響を与える可能性がある要因をさらに調べる必要がある。父親の影響，通っている園の影響のみならず，きょうだいの影響や友人の影響も検討する必要がある。

また，本研究で用いた PIPS 課題は，正解の選択肢が明らかであった。そのため，自分だったら実際にどうするかというよりも，どの選択肢が最も評価される行為かという道徳的な回答になったと思われる。そのため多くの子どもが全問正解し，得点に差がなかった可能性が考えられる。もしくは選択肢が 3 種類のみであったため，実際の自分の対応とは異なる選択肢を選ばざるを得なかった可能性がある。加えて本研究では紙芝居を用いた想像上の社会的問題場面に対しての対処方法であったため, 現実味が薄かったと考えられる。このような可能性を検討するため，実際の場面観察が必要だろう。また，対象児を年少以上に限定し, 自由回答による実験を行う必要もあるだろう。以上の点は，今後の課題としたい。

付　記

本論文は，第一筆者が 2018 年度に愛知淑徳大学心理学部に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

謝　辞

本論文の作成にあたり，研究にご協力くださったみなさまに心より感謝申し上げます。

引用文献

青木 豊・庄司 順一・鈴木 浩之・加藤 芳明・平部 正樹・安部 伸吾・松尾 真規子（2008）. 分離後の被虐待乳幼児の 2 つの処遇――里親養育と施設養育とによる心理・社会的発達についての比較的研究第一報―― 研究助成論文集，*44*，1-13.

青木 豊・福榮 太郎・吉松 奈央（2011）. 短縮版アタッチメント行動チェックリストの作成とその信頼性・妥当性の検討　研究助成論文集，

47, 48-55.

東 敦子・野辺地 正之（1992）. 幼児の社会的問題解決能力に関する発達的研究――けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス――教育心理学研究, *40*, 64-72. https://doi.org/10.5926/jjep1953.40.1_64

Bowlby, J.（1973）. *Attachment and Loss*: Vol. 2. Separation. Basic, New York.

廣瀬 あや・岩立 志津夫（2011）. 里親の養育態度が里子の生活に対する充実感や自己受容，いらだち等に与える影響　家族心理学研究, 25, 160-173. https: //doi. org/10. 57469/jafp. 25. 2_160

本多 順子（2002）. 児童の「母親の対する愛着」測定尺度の作成　カウンセリング研究, *35*, 246-255.

池田 由子（1981）. 乳児院収容児の長期予後調査的研究第一報里子・養子になった子どもたちの予後について　精神衛生研究, *28*, 1-24.

金山 元春・金山 佐喜子・磯部 美良・岡村 寿代・佐藤 正二・佐藤 容子（2011）. 幼児用社会的スキル尺度（保育者評定版）の開発　カウンセリング研究, *44*, 28-38.

柏木 恵子（1988）. 幼児期における「自己」の発達　東京大学出版会

粕谷 貴志・菅原 正和・河村 茂雄（2000）. 中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連について　岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 10, 91-98. https://doi.org/10.15113/00011105

Lindhiem, O., & Dozier, M.（2007）. Caregiver commitment to foster children: The role of child behavior. *Child Abuse & Neglect*, *31*, 361-374. https://doi.org/10.1016/j.chiabu.2006.12.003

Loeber, R., & Stouthamer-Loeber, M.（1986）. Family factors as correlates and predictors of juvenile conduct problems and delinquency. In M. Tony, & N. Morris（Eds.）, *Crime and justice: An annual review of research:* Vol. 7. Chicago: University of Chicago Press. https: // doi.org/10.1086/449112

Meins, E.（1997）. *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex, UK: Psychology Press.

Meins, E., Fernyhough, C., Wainerigh, R., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M.（2002）. Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding. *Child Development*, *73*, 1715-1736. https://doi.org/10.1111/1467-8624.00501

Mikulincer, M., & Florian, V.（1998）. The relationship between adult attachment styles and emotional and cognitive reactions to stressful events. In J. A. Simpson & W. S. Rholes（Eds.）, *Attachment theory and close relationships*（pp. 143-165.）. New York: Guilford.

森下 正康（2003）. 幼児の自己制御機能の発達研究　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, *13*, 47-56.

酒井 厚（2005）. 対人信頼感の発達――児童期から青年期へ――　川島書店

篠原 郁子（2003）. 〈mind-mindedness〉とは何か――養育者による子どもの心的状態の読み取りとそれが支える相互作用の在り方――　教育方法の探究, *6*, 69–75. https://doi.org/10.14989/190275

篠原 郁子（2011）. 母親の mind-mindedness と子どもの信念・感情理解の発達――生後 5 年間の縦断調査――　発達心理学研究, *22*, 240-250. https://doi.org/10.11201/jjdp.22.240

菅原 ますみ・北村 俊則・戸田 まり・島 悟・佐藤 達哉・向井 隆代（1999）. 子どもの問題行動の発達――Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から――　発達心理学研究, *10*, 32-45. https: //doi. org/10.11201/jjdp.10.32

田中 陽子・長友 真実・前田 直樹・栗山 和広・高山 厳（2006）. 児童養護施設における被虐待児への心理的ケアに関する研究（2）　九州保健福祉大学研究紀要, *7*, 103–112. https://doi.org/10.15069/00000630

坪井 裕子（2005）. Child Behavior Checklist / 4-18（CBCL）による被虐待児の行動と情緒の特徴

――児童養護施設における調査の検討――　教育心理学研究，*53*，110-121. https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.1_110

Wakelyn, J.（2019）. Therapeutic approaches with babies and young children in care: Observation and attention. London: Taylor & Francis Group.（御園生直美・岩崎美奈子監訳，佐藤明子訳，ジェニファー・ウェイクリン著〔2023〕里親養育における乳幼児理解と支援――乳幼児観察から「ウォッチ・ミー・プレイ！」の実践へ――　誠信書房.

八越 忍・新井 邦二郎（2007）. 母親の養育態度が小学生の社会的スキル，共感性，学級適応に及ぼす影響　発達臨床心理学研究，*18*，33-40.

山田 美菜子・和田 えり・植田 瑞穂・桂田 恵美子（2014）. 幼児の心の理論の獲得と感情理解・社会的スキルの関連　関西学院大学心理化学研究，*40*，39-46.

山口 敬子（2007）. 要養護児童のアタッチメント形成と里親委託制度　福祉社会研究，*8*，65-79.

Effects of Biological and Attachment Relationships in Mother-Child Dyads on Children's Social Adaptation: An Investigation through Comparison of Biological and Foster Children's Social Adaptation Abilities

Yayoi Nishioka（*Heroskids Fujigaoka*）**and Yoko Sakata**（*Aichi Shukutoku University*）

Abstract:

While numerous studies have examined the influence of mother-child relationships on children's social adaptation, it remains unclear whether the presence or absence of a biological relationship or the quality of the attachment between mother and child is more important in this aspect. Given this context, this study focused on investigating the relevance of biological relationships and attachment between mother and child to children's problem behavior and problem-solving abilities. The study included children with a biological connection to their mothers（biological children）and children without a biological connection to their mothers（foster children）, along with their respective mothers. The results indicated that the absence or presence of a biological relationship between mother and child did not affect children's social adaptation at any age. In contrast, an attachment to the mother only influenced the problem behavior of older children, revealing that stable attachment to the mother suppresses children's anxiety and depressive problem behaviors. The results were discussed from the perspective of parent-child relationships.

Keywords: biological relationships, attachment relationship, biological children, foster children